

方改革を実現している合掌苑のやり方なら生き残れるだろうし、何よりも利用者にとってありがたいのは、介護スタッフが生き生きと働いている明るい施設があることだ。

明るい未来と暗い未来

三六人が焼死した「京都アニメーション」スタジオ放火事件という痛ましい事件があった。放火犯は「精神的な疾患があるため訪問看護を受けることもあった」(NHKニュース・七月十九日)と報じられた。あの犯行は、本来なら、やるべき施策を講じていたなら事前に防ぐことができたとは僕は確信している。

希望のない話で締めくくりたくないと思っている。

医療・介護という日本最大のビジネスには構造改革が求められている。

六〇〇万人の雇用者がより安定的な職業集団として維持されることで、それは何よりも全国・地方に万遍なく雇用が行き届き、誰もが幸福な老後を過ごすことができるようになるためでもある(例、北海道への地方交付税交付金は一兆円だが、医療・介護で三兆円が移転している)。

僕は道路公団を民営化した。その際に、一本の高速道路を建設する場合、建設費や維持管理のコスト、どのくらいの交通量が見込まれ幾らの料金をとれば収支が見合うのか。日常的にかかっている維持管理コストがどのくらいで何を削ればよいのか、また優先的に建設する路線とそうでないものに振り分けるためにどう考えたらよいのか、その収支計算をさんざんやってきた。供給側の都合ではなく、ユーザーとしての負担に見合ったサービスを享受するためであった。

我われを待ち受けているのはたして明るい未来なのか暗い未来なのか、もちろんこの論考を不安を取り除くための処方箋の第一歩としたい。